

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 海 野 聡

本論文は「奈良時代の造営体制と建築」と題されたもので、奈良時代における建築の造営組織と、それが具体的に展開された結果である建築技術、建築構造・空間と、その同時代的な認識の解明を目標とする。そのための資料としたのは、現存遺構・発掘報告・文献史料であって、近年次々と発見されてきた地方の発掘情報も加えている。従来の奈良時代建築史研究では主として日本の中心地、特に奈良に存在した建築群が対象であったが、本論文では地方における造営についても、広く検討したことが大きな特徴である。

本論文は、研究背景・問題意識を述べた序章、奈良時代における造営組織・技術者・労働者を扱った第Ⅰ部（第1章～5章）、建築技術・構造・空間・認識を扱った第Ⅱ部（第6章～12章）、と結語からなる。

序章は、研究の目的と意義を述べる。

第Ⅰ部、第1章では令外官司である造東大寺司において造営に従事した司工について考察し、その中でも長上工・司工の能力と木工寮の位置づけを明確にした。そして、造東大寺司の技術者の差配と木工寮による技術者及び技術の管理を解明した。第2章では、奈良時代に存在した、官以外の技術者集団である様工を対象に、様工の造営作業における能力や請負契約における主体性について言及し、律令制下における官以外の技術者集団の存在とその実態を解明した。第3章では、地方の造営現場における技術者と労働者の実態を解明するため、専門技術者ではない百姓の造営体制と地方における技術者、特に国府と郡家の技術者の技術力の差を推察した。また律令制下における力役と兵役の分化に着目し、軍団兵士による造営従事の実態を明らかにした。第4章では、陵墓の造営のために置かれた臨時の官である造山司、山作司、作山稜司を検討

し、中央の有力氏族が造営技術集団を保持していたこと、また地方でも郡司や在地豪族が独自に造営技術を保持していたことを明らかにした。第5章では、国分寺伽藍の造営を対象として検討した。その開始の発端を天平12年(740)の七重塔建設に求め、その後の設計段階、実務段階、完成後の維持管理の過程を解明し、同時に国師の果たした役割を検討した。

第Ⅱ部、第6章では、奈良時代に存在した楼閣について、上層の利用状態を明確にし、床が張られていたことや、意匠的機能を明らかとした。第7章では、裳階を取り上げ、裳階の取り付けに関する技術(構法)を整理し、この構法を分類し、時代と関連付けて、裳階の形式とその比較を行った。第8章では、奈良時代の「双堂」という形式について検討した。「双」の字を用いた双軒廊や双倉の事例を参照しつつ、奈良時代に認識されていた双建築の形態を明らかにした。第9章では、国庁や郡庁他の地方官衙の政庁域について検討し、その前庭空間が、律令時代以前から存在する天皇と臣下による空間構成を継承したものであることを解明した。第10では、東大寺庄園である越前国桑原庄の収支決算報告書「桑原庄券」を解読し、地方建築の上部構造を推定した。また、平面規模がその建設費用に直結する要素であることを明らかにした。第11章では、現存する奈良時代の倉庫建築について、その平面の寸法が総間で設計されていることを明らかにした。この成果をもとに下野国河内郡衙の正倉と目されている上神主・茂原遺跡の発掘遺構を分析・検証し、実際に柱間には規格はみられないことを確認した。第12章では、礎石と掘立柱を併用した発掘遺構を対象に、礎石の柱と掘立柱の構造主体に着目し、上部構造を含めた特徴及び機能を検討した。

結語では、本論文の成果をまとめると同時に、造営体制と建築技術の二つの分析概念を用いることにより、本論文で取り扱った奈良時代、日本を越えて、古代全般や、東アジアの建築にまで、研究を拡大することのできる可能性を提案した。

本論文は、すでに十分に解明されたと見なされてきた奈良時代の建築について、発掘情報、文献史料を新たに史料として加え、さらに地方での造営を検討することにより、新たな奈良時代の建設の実像を描いたものである。特に従来十分には検討されてこなかった地方における建設を研究対象として、技術組織論として展開したことは特筆に値する。この研究によって、奈良時代建築の研究 방법이拡大し、今後の研究の可能性が大きく拓かれたことに高い価値を認めることができよう。

よって、本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。